2021.12

MIYAGI まちづくりと地域支え合い

「栗駒の里パン工房おふくろさん」を取材する栗原市栗駒地区の第2層生活支援コーディネーター工藤一恵さん

vol.35
宮城県内外の生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを発信

令和３年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修がスタート

本年度の宮城県生活支援コーディネーター養成研修が、11 月から始まりました。Ｚｏｏｍを活用したオンライン方式で、各回 70 人を超えるご参加をいただいています。基本研修１・２では、就業年数の浅い参加者が目立ち、講義や演習を通じて、生活支援体制整備事業の基礎知識や、コーディネーター及び協議体の役割と動き方について理解を深めました。参加者からは、「コロナ禍でも住民の皆さんが工夫をして、つながりを維持していることに着目」「地域でできていないことではなく、できていることを探すのは、日常の業務で取り組める視点」「関係者が横の連携をとり、こうした住民の活動を大切にして進める事業である」との感想が寄せられました。

＜基本研修＞

【基本研修１】〈地域福祉コーディネート基礎１〉
11 月 4 日(木) 開催しました

【基本研修２】〈生活支援コーディネート基礎２〉
11 月 17 日(水) 開催しました

【基本研修３】〈地域資源の発見の仕方・広げ方〉
1 月 13 日(木)

＜実践研修＞

【実践研修１】〈地域福祉コーディネート基礎〉
1 月 28 日(金)

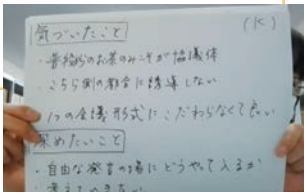
【実践研修２】〈協議体運営の工夫〉
2 月 4 日(金)

【実践研修３】〈地域資源の活かし方〉
2 月 10 日(木)

【実践研修４】〈現状分析・住民支援の手法検討会〉
2 月 25 日(金)

【実践研修５】〈情報交換会〉
県央=12 月 2 日(木)
県南=12 月 10 日(金)
県北=12 月 21 日(火)

基本研修２の様子



演習後の発表

栗原市
【くりはらし】人口6万4782人、2万4517世帯、高齢化率40.7%。市域は旧町村10地区、255行政区で構成。第2層（日常生活圏域）は10地区だが、地域づくりは行政区（自治会・地区社協）が基本単位。生活支援コーディネーターは、第1層を市介護福祉課が組織として担当。第2層は市社協が10地区に1人ずつ配置。なお、今回取り上げる栗駒地区は1万0063人、3832世帯、高齢化率44.7%。若柳地区は1万1428人、4373世帯、39.4%（すべて2021年10月末時点）

生活支援コーディネーターに聞く
まちづくりの今 14
栗原市栗駒・若柳地区

圏域間で地域づくり連携

栗原市栗駒・若柳地区
工藤一恵さん（栗駒）髙橋由利さん（若柳）

第2層生活支援コーディネーターの工藤一恵さん（左、栗駒地区）と髙橋由利さん（右、若柳地区）、「栗駒の里パン工房おふくろさん」代表の佐藤博泰さん（栗原市社会福祉協議会若柳支所で撮影）

「支え合い」のパン工房

「ここに集い、働く人たちが、喜びや楽しさ、生きがいを持つこと。それが私の考える一番大事な〝収益〟です」

こう話すのは、栗原市栗駒の滝ノ原行政区にある「栗駒の里パン工房おふくろさん」代表、佐藤博泰さん（73歳）。

「商売としてはずっと儲けが出ない状態。でも、元々お金のためじゃないから、それで構わないんですよ」

滝ノ原は栗駒山麓に位置。かつて林業で栄えたが、少子高齢化と人口減少が続く。今年10月末時点の人口は156人（58世帯）で高齢化率は51・9%。

工房は2010年7月、「無理なく楽しく村おこしをしよう」と、佐藤さんをはじめ滝ノ原に暮らす当時60歳代の男女7人でスタート。地元産の米粉を使ったパンやシフォンケーキ、ピザ、麺などを製造販売し、人気を博している。

販売は、日曜は工房内で、水曜と金曜はそれぞれ築館・若柳地区、栗駒・鶯沢地区の郵便局やJA、福祉・介護事業所などで行う。

今年で開業11年目。スタッフの顔ぶれは若干の入れ替わりがあったが、現在も60～80歳代の5人が元気に働く。ちなみに女性陣は全員、農家の主婦。なかには、工房に入って初めて自分で現金収入を得たという人も。

「食べた人の『おいしい』の一言や、売りに行った先での『待ってたよ』の声が、すごくうれしい。仕事の合間に、仲間とお茶飲みができるのもいい。単なる仕事じゃなく、楽しみ、生きがいだ」とスタッフは口をそろえる。

スタッフはお茶飲み仲間、そして支え合いの仲間でもある。一人暮らしの佐藤さんを気遣って仲間が料理を差し入れたり、家の掃除を助けたり。持病の腰痛が悪化したときは、移動や入退院の手伝いもした。

女性スタッフの一人が夫を亡くしたときは、佐藤さんらがすぐ病院に駆け付け、自宅での通夜に必要な準備や連絡などを引き受けた。

スタッフが住む滝ノ原の「上田・大原」地区は12戸の小集落で、住民のまとまりのよさで知られる。佐藤さんによると、その背景には全戸加入の水道組合がある。

組合は、水源や貯水タンク、配水管といった集落の上水施設の整備と維持管理を目的に結成。ほぼ半世紀にわたって自分たちの飲み水を確保してきた。維持管理作業は6戸ずつの2班で当番を組み、2か月に1度、施設の清掃や周辺の草刈りなどを行う。作業のあとには慰労の会。また、正月は新年会、春は花見、秋には敬老行事と季節ごとの親睦イベントも催す。集落内で冠婚葬祭があれば互助組織としても機能する。

「組合はつながりの基礎」と佐藤さん。工房の開設準備にも、組合の仲間が手弁当で駆け付けてくれた。

今年11月7日、コロナ禍が収まってきたタイミングで、組合はほぼ1年半ぶりに懇親会を開催。

市社会福祉協議会の栗駒地区担当第2層生活支援コーディネーター、工藤一恵さんがその懇親会を訪問。翌日も工房を訪れ、つながりと支え合いの実態を取材した。

工房はこれまで何度もテレビや新聞の取材を受け、活動内容はよく知られている。ただ、スタッフ同士のつながりや暮らしのなかの支え合いに踏み込んだ取材・紹介は行われていない。

「つながりと支え合いにこそ、組合や工房の重要な意義と価値があります」と工藤さんは指摘。取材成果は、市社協発行の「栗原市地域支え合い情報誌」に掲載する予定だ。

生活支援コーディネーターに聞く

まちづくりの今 14

栗原市栗駒・若柳地区

パン工房でのピザづくりの様子を取材する工藤さん（中央奥）

高橋さん（左手前）の仲立ちで
若柳の高齢者グループがパン工房を訪問

栗駒地区の第2層協議体でパン工房の説明をする佐藤さん
（中央、写真提供:栗原市社会福祉協議会栗駒支所）

地域づくりの「トリガー」

取材に先立つ10月28日、栗駒地区の第2層協議体で、工房の活動報告があった。そのうえで「住み慣れた地域で幸せに暮らすために」をテーマに意見交換が行われた。

実は、佐藤さんは滝ノ原の自治会長、地区社協会長、市社協栗駒支部副支部長であり、栗駒の第2層協議体の構成員でもある。

2005年の町村合併で栗原市が誕生した際、市社協は、行政区単位で地域福祉向上を図る「小地域活動」を展開。併せて地区社協の設立も進めた。このとき佐藤さんは、地区社協の立ち上げに尽力、キーパーソンの一人として活躍していた。

工房がオープンする4か月ほど前の2010年3月、佐藤さんと仲間たちは、栗駒に隣接する鶯沢地区の高齢者入居施設でピザ焼きのボランティア活動を行う。その場で、当時市社協の鶯沢支所に所属し、現在は若柳地区の第2層生活支援コーディネーターを務める髙橋由利さん（本紙第26号に関連記事）と出会った。

髙橋さんは、市内各地区での地域づくりの講座・研修会に佐藤さんを講師として招き、その活動を広く知ってもらえるようにした。また、東日本大震災の被災者支援の一環で、石巻市や山元町などで、米粉の麺や郷土料理「はっと」を振る舞う炊き出し活動の仲立ちをした。

最近では、今年8月から10月にかけて、若柳の高齢者グループの栗駒山登山に佐藤さんをガイドとして引き込み、グループの親睦会を後日、工房で開いて地区間の住民交流を実現させた。

こうした動きの狙いを髙橋さんは次のように説明する。

「佐藤さんと地域づくりへの思いを同じくする人や、私たちが知らないだけですでに地域づくりを実践している人を見つけ出す、あるいは生み出したいんです」

髙橋さんは、生活支援体制整備事業の開始前から、市社協の小地域活動で同事業を先取りするような取り組みを展開、現在へとつなげている。

そのなかで関わりを深めてきた佐藤さんは、髙橋さんを「昔も今もコーディネーター」と評する。自身の工房での活動や、地域づくり実践者として講師を務めることに関しては「高齢でも今日を喜び、あすに楽しみを持って暮らせる地域づくりを広める、そのトリガー（引き金）になれればいい」と期待を込める。

トリガーを引くのはコーディネーターたち。その射程は圏域の枠を越え、新たな住民活動の種をまく。

工藤さんは岩手県一関市出身、鶯沢地区在住の50歳。旧鶯沢町時代から社協に勤務。好きな言葉は「笑顔」。

髙橋さんは築館地区出身、在住の54歳。「栗原市」誕生の2005年に市社協入職。「栗駒山麓ジオパーク」の公認ガイドでもある。

まいた種が芽吹き、成長し、実をつけるまでは長い時間がかかる。担当圏域にこだわらず、市の第2層コーディネーターたちが連携し、地域づくりに挑み続ける。

利

まちづくり短信

宮城県地域支え合い・
生活支援推進連絡会議事務局
（宮城県社会福祉協議会）
〈10～11月期〉

自主活動グループ交流会開催（南三陸町）〈10月26日ほか〉

南三陸町社会福祉協議会は、歌津・戸倉・入谷・志津川の４地区でそれぞれ、10月26日から11月18日にかけて、自主活動グループ交流会を開催。サロン活動や地域交流に取り組む住民らが参加し、新型コロナウイルスの感染予防と地域のつながり維持の両立について意見を交わしました。

はじめに有識者の講演があり、戸倉と志津川では仙台白百合女子大学准教授の志水田鶴子さん、歌津と入谷で宮城県社会福祉士会の真壁さおりさんが、つながりの重要性やコロナ下の地域づくりについて説明。

このなかで志水さんは、地域で交流を保つことや役割を持つことが健康維持に役立つとし、適切な感染予防策を日々の暮らしに定着させるよう呼びかけました。

真壁さんは、コロナ禍がつながりのたいせつさに気づかせてくれたと指摘。そのうえでフレイル予防の３要素（栄養・身体活動・社会参加）のうち、特に社会参加の低下に注意を促しました。

このほか、町地域包括支援センターの保健師による手洗いや手指消毒の解説も行われました。

戸倉地区の交流会（10月28日）

お宝発表会で住民活動を顕彰（色麻町）〈11月19日〉

色麻町社会福祉協議会は11月19日、初の「お宝発表会」を町農村環境改善センターで開催。花畑整備を通じたつながりづくりをはじめ、住民主体の送迎付きサロン、移住者らが家族ぐるみで親しむ交流農園、商工会有志による地域交流拠点づくり、集いと見守りの場になっている酒販店など５つの「お宝」を紹介し、それぞれに賞を贈りました。

冒頭あいさつした早坂利悦町長は、「住民の支え合いをお宝と呼ぶのはとてもいい。町にとって大事なものだと改めて気づかされる」と述べました。

続いてＮＰＯ法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長、池田昌弘さんが「暮らしのなかに支え合いがいっぱい」をテーマに基調講演。つながりを育む場や活動の重要性を訴えました。

発表会について町社協会長の髙橋宣行さんは、「住民活動の成果をこのような形で披露できてよかった。こうした活動の波及に弾みがつく」と期待。来年度以降の継続を検討する考えを示しました。

事務局では、生活支援コーディネーターと協議体が取り組む地域づくりの後方支援をしています。住民、専門職、行政職向けの研修・勉強会や地域づくり実践者の事例発表・交流会などの企画、開催に必要なアドバイザーや講師の選定および招へいに向けた調整もお手伝いします。まずはお気軽にご相談ください。

電話：022-266-2621
担当：佐藤、菱沼、板橋

住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙
MiYAGi まちづくりと地域支え合い vol.35
バックナンバーがホームページで読めます http://www.clc-japan.com/sasaeai_m/

発行日　2021年11月30日
発　行　宮城県保健福祉部長寿社会政策課
編　集　特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）